福貿 FUKUBOU NEWS
Fukuoka Foreign Trade Association

福岡貿易会 会員広報誌
発行・編集／社団法人 福岡貿易会
〒812-8505福岡市博多区博多駅前2-9-28
福岡商工会議所ビル7階
TEL.092-452-0707 FAX.092-452-0700
E-mail: info@fukuoka-fta.or.jp
vol.4

新年明けましておめでとうございます。

年　頭　ご　挨　拶

社団法人　福岡貿易会
会　長　　並田　正一

新年、明けましてお目出とうございます。

会員の皆様には何かと平素より会の運営、発展にご協力を賜わり有難うございます。年頭に際し改めてお礼を申し上げます。

さて、昨年は原油高騰、サブプライム問題等で世界経済に暗雲が垂れ込め、予断を許さない状況になり始めて来ましたが、この流れを受け本年も年初より株価の大幅な下落、円相場の急騰など波乱の年明けとなりました。地球温暖化などと伴に、世の中の流れが大きく変わりつつあるような予感が致します。

このような中で、福岡貿易会も当会の原点であります“地域の貿易振興”という目標を再認識し、これまで以上の努力をして行かなければならないと考えております。

幸い、福岡市を中心に関係諸団体、在福外国公館の温かいご支援をいただいており、昨年夏には事務所を商工会議所・ビルに移すことにより、スペースの拡大、会員サービスの充実を図れる体制を整えることが出来ました。また、会員数も念願の250社を上回り、質、量ともにこれまでにない水準に達して来たのではないかと自負致しております。

さらに、今年はオリンピック・イヤーで隣国での開催により福岡でもかなりの盛り上がりが予想されますが、それに呼応するように博多港の整備も一段と進む他、新空港の問題にも方向性が出て来るなど、福岡を取り巻く海外ビジネスの環境はより一層向上して参ることでしょう。

それだけに本年も貿易セミナー、相談事業、講演会、海外視察などをより活発に行い、会員及び地域の海外ビジネス関連企業のご期待に応えて行きたいと思います。

特に、今年は当会が設立されて50年目に当たるフシ目の年になります。記念事業として著名な国際経済通による講演会、大型海外経済ミッション派遣、記念誌の発行などを計画しておりますので何卒皆様方のご協力、ご支援をお願い申し上げます。

最後になりますが、会員各位にとりまして、今年が良い年になることを祈念致しまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

CONTENTS

【TOPICS】平成１９年度 会員交流会 …… 1P
【報告】ドバイ経済視察団派遣事業 …… 2～3P
【寄稿】"狂気の街"ドバイに乾杯 …… 4P
【奮戦記】私の日記帳より …… 5～6P
【報告】フォローアップセミナー・中国語研修会 …… 6P
【会員メッセージ】…… 裏表紙

トピックス

平成１９年度　会員交流会

今年の会員交流会は、第１部 講演会、第２部 懇談会の二部形式で開催しました。講演会では、吉田宏福岡市長に「福岡市のまちづくり～ 2011福岡市グランドデザインの策定～」と題して、福岡市のまちづくり、アジアのビジネス拠点形成など、当会にとってもこれからの目標や方向性を見極める上で非常に参考となるご講話をいただきました。

また、続いて行われた懇談会には、市長をはじめ市幹部、九州経済産業局、福岡県並びに在福の外国公館等からもご参加いただき盛会に行われました。

○日　時：平成19年12月5日（水）17:00 ～ 19:00
○場　所：西鉄グランドホテル
○出席者：約90名

並田会長の開催挨拶

吉田市長による講演

来賓紹介

角川副会長による乾杯の音頭

懇談風景

懇談風景

報告　ドバイ経済視察団派遣事業

当会では、海外市場開拓事業の一環として、毎年会員が関心の高い国や地域に経済視察団を派遣している。
本年度は、物流・金融・リゾート等で世界的に注目されている「ドバイ」のビジネス事情等を調査するために経済視察団を派遣した。
１１月１８日から同月２３日までの６日間の日程で、並田会長（西研グラフィックス㈱代表取締役社長）を団長とする２２名により、ドバイを訪問し（うち１７名は２８日までエジプト経済視察参加）、経済動向・投資環境の調査や企業視察等を行った。

○ドバイの概況

ドバイは、アラブ首長国連邦（ＵＡＥ）の７首長国の一つで、貿易・交通のハブ（中核）としての地位を固め、最近では金融機関の集積地としても世界的に注目されている。
原油輸出に依存しない経済建設のモデルとして注目を集めているが、原油価格の高騰で潤った周辺産油国からの投資マネーの流入が成長の源泉になっている。２００６年のＵＡＥの国内総生産（ＧＤＰ）は１,６２０億ドル（約１９兆７千６百億円）、実質ＧＤＰ成長率は１０．７%に達した。ドバイはＵＡＥのＧＤＰの約３割を占め、実質成長率はここ数年１１%前後を保っているとみられる。最大の首長国アブダビが主に原油輸出でＵＡＥのＧＤＰの約６割を稼ぐのに対し、ドバイでは原油輸出の寄与度が５%前後にすぎない。極めて大規模な建設ラッシュが続いており、世界中から建設関連業者が進出し、日本の建設業も多くのビッグプロジェクトに相次いで参入している。ほとんどのプロジェクトが２００８年～２０１０年完成を目指して進んでいる状況である。

人　口：１４２万人
（うち外国人が８０%以上を占める）
ＧＤＰ：４６０億ドル
輸　出：５０億ドル
輸　入：５９９億ドル
再輸出：２１３億ドル
港湾貨物取扱量：１１，００３万トン

開発事業

・パーム・ジュメイラ：椰子型人工リゾート島
・パーム・ジュベル・アリ：同上、規模1.5倍
・ザ・ワールド：世界の国々を模した人工島
・ブルジュ・ドバイ：800m超の世界一ビルを中心に街を建設
・マリナ地区都市開発：超高層ビル群
・ドバイ・メトロ（地下鉄）：空港からジュベルアリまで53km
・ドバイモノレール：パーム・ジュメイラ地区　など多数。

主な活動概要

１．経済セミナー（ジェトロ・ドバイ事務所訪問）

ジェトロ・ドバイ事務所　皆木良夫所長からドバイの経済概況等について説明を受けた。

２．DP WORLD社訪問（政府系港湾管理会社）

商船三井の大倉氏の案内により、DP WORLD社訪問。
DP WORLD社のSyed Umair Ahmed氏よりプレゼンテーションを受けた。

港湾施設

概　要

・人工の港では世界最大
・現在（2006年）892万TEU　（世界第8位）
・水深　-17.5m
・荷役効率が高い世界最先端のコンテナクレーン（一度に20フィートコンテナを４本つかめる）
・貨物全体のうち６割、７割がトランジット又は再輸出。
・港湾物流、フリーゾーン、第２国際空港との連繋
（第２国際空港建設中（2007年滑走路２本完成）、 4500m滑走路６本（最終）乗降客１億５千万人）

３．ジュベル・アリ・フリーゾーン（JAFZA）訪問

Fouad Mohammed氏よりプレゼンテーションを受けた。
○特徴　・ドバイを中継基地として発展させるため、進出企業に最大のインセンティブを与えている。
①100%外資ＯＫ　②50年間の法人税、所得税免除
③利益、換金持ち出しＯＫ　④資本投下の再販ＯＫ
・現在の進出企業　約6,000社（世界12か国、日本からは108社）
ヨーロッパ、インド、中東、日本、中国、香港、台湾、韓国など（中継貿易：77%、製造業20%、サービス3%）
・ワンストップサービス

報告 ドバイ経済視察団派遣事業

4. フリーゾーン進出企業表敬訪問(三井倉庫)

5. ナキール(NAKHEEL)社訪問

ナキール社の中田氏よりプレゼンテーションを受けた。

○概要

①パーム・ジュメイラ:椰子型人工リゾート島

②パーム・ジュベル・アリ:同上、規模1.5倍

③ザ・ワールド:世界の国々を模した人工島などの開発事業を行っている。

①は、直径５ｋｍの規模で、2006年12月に幹部完成。埋立工事はオランダの会社が施工。電気、水道、下水道等のインフラは陸側から誘引。

・1,620戸のリゾート住宅は発売７２時間で完売。(実際に居住している)

・中央部にタワービル(42階、350m)建設中。

・島内移動用のモノレールも建設中。最終的には12万の人口になる。

②は、直径8kmの規模で、2006年に埋立完了。完売している。

③は、埋め立てした状態で各島を販売(現在50%が売却済)し、買った人が作りたい物を作る。

※その他、ナキール社では1,000mの超高層ビル建設の計画を立てている。(日本の設計で、一部着工している。)

パーム・ジュメイラ(模型)

実際のパーム・ジュメイラ

6. ダマック(DAMAC)社訪問

ダマック社のAhmad Mir氏よりプレゼンテーションを受ける。ダマック社は、不動産開発会社で、世界一の高層ビルのブルジュ・ドバイに隣接するビジネス・ベイ地区開発やXLタワー、ドバイ国際金融センター等数々のビル建設等を手がけている。

7. 在ドバイ日本総領事公邸にて現地進出日本企業との意見交換会

総領事館より小林総領事、齋藤首席領事、山田領事が出席され、また、現地企業からは、商社、物流、金融関係業者など１７名が出席され、団員との意見交換を行い、現地での苦労話や各種情報など生の声を聞くことができた。

8. ドバイ市内経済視察

モール・オブ・エミレイツ(流通施設)訪問

世界最大級のショッピング複合施設。

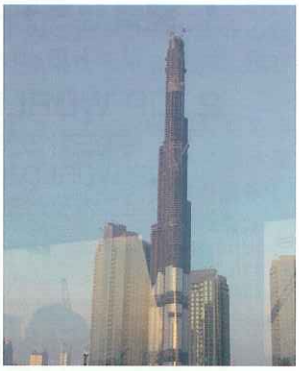
床面積:112ヘクタール

建設中のブルジュ・ドバイ

ブルジュ・ドバイは800m超の予定

現在、６００mを超え世界一

モール・オブ・エミレイツ



建設中のブルジュ・ドバイ

建設ラッシュのビル群

＜ドバイ経済視察団参加者からのメッセージ＞

“狂気の街”　ドバイに乾杯

博多港開発株式会社　宇都　勝史

かつて、この地が荒涼たる砂漠で、ラクダが陸の主役であったとは、今は想像しにくい。

右を見ても、左を見ても建設中のビル群で視界は遮られる。世界の建設機械の２５％がこのドバイに集積していると言われる由縁もあながち嘘ではない。

「何と言う国だ！全く狂気の沙汰だ！！」完成予想図を見てさらに驚き、デザイン・規模共々これまでお目に掛かったことの無いものずくめである。

設計者と話してみても、クライアントから要望されるキーワードは「世界一」、「世界にないもの」だそうだ。アルマーニホテルとオフィス、高級住宅等のコンプレックスになった高さ８００メーターのブルジュドバイ、福岡の人工島の当社工区（約１００㌶）より広い床面積（１１２㌶）をもつショッピング施設ドバイモール等々どれを見てもスケール感が違ってイメージしにくいものだ。

シェイク・ラシード首長の強力な指導力の下、ポストオイル時代を見据えて国家戦略として中東の貿易センター、金融センターにする事をもくろみ取り組んできた。後を引き継いだシェイク・ムハンマド皇太子も、さらに観光の視点にも重点をおかれ継続して取り組んでいる。この無機質な不毛の地を人間くさい街に仕立てようとしている。

コンテナーの取扱量も８９２万ＴＥＵを越し、現在工事中で２０１８年完成を目標に進めている第二国際空港は、４，５００ｍ×６本の滑走路を持ち年間１億５千万人の利用客と１，２００万トンの取扱量を見込んでいると言う。

ドバイは、その受け入れ施設を急ピッチで準備中だ。国営持ち株会社ドバイワールドの傘下に開発会社、投資、不動産、港湾ＦＺ、造船・・・等７つの国営会社をもちスピーディーに行動出来る体制を整備して取り組んでいる。

ジュベル・アリ港背後のフリーゾーンでは外国企業に対して

１．外資１００％会社でもよい
２．５０年間法人税、所得税免除
３．輸入関税免除
４．外為制約なし
５．外国人労働者に関する制約なし
６．利潤、資本の本国送還自由

等の他フリーゾーン内で各種サービスが提供されており、進出企業の現地事務所や工場立ち上げの負担軽減の工夫がされている。その結果、１２０カ国６，０００社の企業が進出しており、日本からも１００社を越える企業の参入が見られる。

狂気の街と思っていたが様子が違う、この街は綿密な国家政策を、目もくらむ早さで成し遂げようとしている。一気呵成に急ピッチで、狂気の沙汰と思わせることで世界の注目の的、インパクトを与えた。すでに、ＵＡＥのドバイでなく世界のドバイに格上げしている感すらする。その事も彼らの戦略の中にとっくに組み込まれたストーリーかもしれぬ。昼夜いとわず建設に取り組むところも解る気がする。

サブプライムローンの問題、原油価格の高騰、金余りの周辺産油国等世界情勢の変化を見たとき、石油に頼らぬ国造りのためには絶好のチャンスと読み切って、国家施策に自信を持って取り組んでいるのが今のドバイだと言える。今までの歴史にはない新しき挑戦をしている、数十年後に受けるであろう歴史の評価も意識して突き進もうとしている。すさまじいエネルギーがいることも覚悟の上だ。

ドバイは新しい歴史を生み出して見せてくれそうな予感がする。中東に携わる日本関係者の多くから、ドバイの無謀とも映る乱開発や大胆過ぎる経済運営を危ぶむ声も聞かれるが、私は、ドバイの未来に期待したい。そして次世代への最高のプレゼントになってくれることを信じる。

『狂気の街　ドバイに乾杯！！』

奮戦記

私の日記帳より

博多港運㈱会長　角川　敏行
（福岡貿易会 副会長）

1980年9月24日（イスラム共和国イラン・フーゼスタン州マシャールにて記す）

「ドカーン・ズッシーン！」

私の人生を振り返ってみても経験したことのない異様で強烈な“音”が、何の前触れもなく鼓膜を突き破るような勢いで体内に飛び込んできた。

午前11時、私たちが勤務しているイラン南部バンダル・ホメイニに建設中の、完成の暁には世界最大規模の石油化学コンビナートとなる（筈の）プラント・サイトめがけて、イラク空軍のミグ戦闘爆撃機から発射されたソ連製のロケット爆弾がオフィスの至近距離地点に着弾したのである。

「ドカーン」は、爆弾が炸裂する乾いた響きのもの凄い高音で、一瞬、脳みそと鼓膜がバラバラに飛び散ってしまったような錯覚を覚え、反射的に両腕で頭と耳を覆う姿勢をとったように記憶している。「ズッシーン」は着弾による地響きで、身体の内部即ち五臓六腑が抉り取られるような衝撃である。

この相異なる二種混合の衝撃を殆んど同時に受けた瞬間、昨夜の「禁じられた遊び」（イスラム教義に反する行為―飲酒等）の度が過ぎてモーローとして正常な機能が麻痺したままになっていた我が頭脳では、何事が起こったのか、というより起こる筈がないことが起こってしまったということを理解するまで若干の時を要したが、どうやらこれは夢ではなく現実の事態であることが明確になるにつれてやり場のない怒りが心の底からこみ上げてきた。

日本のどこかの経営トップが「何故だ！」と叫んだあの心境である。周りを見渡してみると不思議なことにデスクに着いている筈のイラン人の部下の姿が一人も見えない。（あとで判ったことだがスタッフの中にいた“サバク（秘密警察員）”の情報で事前に退避したものと思われる）。

私の秘書兼タイピストのインド人（名前はラマチャンドラン、通称「ラマチャン」）がデスクの下から頭を出して手招きしている。隣のデスクの下に潜り込んだ途端に第二弾が着弾し同じ衝撃が全身を貫く。

「ラマチャン！何事が起こったんだ！」

「イラキー・ジェットファイター・・・」

「そんなことは分かっている。ここは日本人が働いている場所だとわかっていてなぜ攻撃の目標にされるのか・・！」

「サダム（イラクのフセイン大統領の名前）に聞いてください、私では説明できません。そんなことよりボス、ヘルメットはどうしたんですか！」

別のデスクの下から今度は日本人スタッフの声あり

「ボス！それにケツが出てますヨ～！　頭隠して尻カクサン　ウヒ・ウヒヒヒ・・・」

「オレの名前おちょくって笑ってる場合か！この馬鹿!!」

以下、しばらくの間、訳の分からない、相手の顔も見えない“アンダーデスクの会話”が続けられることになったのだが、お互いの存在（無事）の確認と恐怖感の増幅を和らげる効果はあったようだ。

ラマチャンは英語とペルシャ語（イラン語）は堪能だが日本語は全く喋れない。

従って上記、以下（紙面の都合で省略）の会話は日本人同士の日本語を含めて３カ国語のミックスであるが、緊急事態に際しても結構意志の疎通が出来たことが何よりであった。

次の瞬間、自分でも何故そのような行動をとったのか分からない侭、はじかれたようにヘルメットを片手に部下の制止を振りきって、ガラスの割れた玄関のドアをこじ開けて屋外に飛び出していた。衝動的に仲間の安否が脳裏に閃いたのである。

爆煙と砂塵の渦巻きの中に見たのは、全身砂と泥にまみれ放心状態の足どりでこちらに向かってヨロヨロと歩いてくる三人の仲間の亡霊のような姿であった。

着弾の瞬間側溝に飛び込んだのか、爆風で吹き飛ばされて側溝に転がり落ちたのか当人たちの証言にあやふやな点はあったものの、何れにせよ、悪臭ふんぷんたる油の混じったドロドロの汚水をたたえた側溝のお陰で奇跡的に命が助かったことが何よりで、肩を寄せ合ってメッカの方角に向かってアラーの神に感謝の祈りを捧げることになったのである。

＜後日談として＞

事後の調査で分かったことですがこの空爆はミグ戦闘爆撃機数機によるものでサイト内に投下された爆弾の数は6発、その内本来の機能（爆発）を果たしたもの2発、残り4発は着弾はしたものの不発弾だったようです。

以後数日に亘って攻撃を受けましたが、何れも不発弾が多かったということでイラク軍当局が在イラクのソ連軍事顧問団にクレームしたところ、「確かに爆弾を提供したのは事実だがそれを本気で実戦に使うとは思わなかった・・・」との回答があったと聞きました。

＜追記＞

私がイランに赴任したのは1978年12月でした。イスラム革命前夜ともいうべき時期で、一つの国家体制が崩壊し、大変な犠牲を払って新しい体制に切り替わっていく様を、幸か不幸か、否応なく実地に体験することになるのであります。

1979年2月11日、シャー・ハン・シャー（王の中の王）と呼ばれ、アメリカの支援もあって磐石と思われていたパーレヴィ王制政権が崩壊し、亡命先のフランスから帰ってきたアヤトラ・ホメイニ師率いる宗教国家“ISRAMIC REPUBLIC OF IRAN“が誕生しました。

新国家発足以降も騒乱の嵐は収まらず、国境は閉鎖されたままで外部との連絡も途絶え、あらゆる通信手段も使用不能となり、何処からの援助もないまま完全な孤立状態が続いていました。私たちが客観的に見て一体どのような状況下に置かれているのかは、手持ちのポータブル・ラジオで

やっと聞き取れるアメリカの「ABC」放送、イギリスの「BBC」放送、それに懐かしい日本語が聞ける「ニッポン放送」の海外向け放送に頼るしかありませんでした。

挙句の果てに、二年後には隣国イラクとの近代兵器を駆使した全面戦争の真っ只中に巻き込まれることになったのであります。

数10冊に及ぶ当時の日記帳を無作為に開いてみてもどのページにも常識では考えられないような壮絶なドラマの記載が眼に入ります。

その中でも“圧巻”は、前述の空爆後イラクと河を隔てた国境の町“コーラムシャー”がイラク軍戦車隊の侵攻により壊滅状態となり、国境から100キロ地点にある私たちの居住地が、押し寄せてきた戦争難民の大群に占拠されるに至って、予め極秘裏に企画していた最後の手段「総引き上げ」を実行することになったくだりであります。

「アンカラ(トルコの首都)へ行こう！」を合言葉に、イラクとの戦火の中をかいくぐっての「3,000キロの大脱出作戦」の強行ということになったのですが、既に紙面の制約を大幅に越えているので改めて機会があればということにさせて頂きます。

フォローアップセミナー

報告

日　時：平成19年12月４日(火)14:00～16:00
ところ：福岡商工会議所２Ｆ　第２研修室

平成19年5月23～24日開催「新人・新任者向け貿易研修会」の続編として、「輸入手続きの迅速化」をテーマに、各地で貿易実務講座の講師として、また物流現場第一線でご活躍の山九株式会社福岡営業所長の松浦遼氏にご講義頂きました。

参加者のことばより
＊輸入案件を担当しており本日の講座は大変役に立ちました。これから新規案件が発生するときは様々なリスクを想定して取り組みたいと思います。
＊事例研究の型で説明がされたので大変理解しやすかった。
＊輸入をするに当たって、たくさんの知識や情報(様々な配送方法など)を身につけ、それを上手に活用する事の重要さが分かった。輸送責任範囲についての話がとても勉強になった。

中国語研修会　※社団法人博多港振興協会との共催

報告

日　時：平成19年10月1日～12月17日(毎週月曜日 19:00～20:15)
ところ：西日本ビル10Ｆ 会議室

10月より始まったこの講座も無事終了することが出来ました。この３ヵ月の間に皆様かなり中国語が上達したのではないかと思います。

参加者のことばより
＊大変楽しかったです。半3声とか2声の上げ方など大変参考になりました。
＊大変充実しており終わってしまうのが残念です。
＊中国語を勉強する上で非常に役立つ講義でした。とても分かり易い説明で今まで良く理解できずにいた部分で新しい発見があったりして楽しかったです。
＊中国に興味のある方々がせっかく集まっているので、語学の枠を超えて中国に関するあまり堅くならない話をする場を月１回あるいは２ヵ月に１回ペースでも設けてもよいのでは？

研修風景

今後開催予定

セミナー

◎食品輸入セミナー
日時：平成20年1月17日(木)14:00～17:00
会場：福岡商工会議所 会議室

◎税関セミナー
日時：平成20年3月中旬予定
会場：福岡商工会議所 会議室

行　事

☆平成19年度 第4回常任理事会
日時：平成20年1月29日(火)11:00～12:00
会場：福岡商工会議所 会議室

☆平成19年度 第2回理事会
日時：平成20年3月下旬予定
会場：福岡商工会議所 会議室